議事録（要旨）

会　　議	第１回第２次武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会
開催日時	令和２年７月２日（木）17:30～19:50
開催場所	中央図書館３階視聴覚ホール
出席委員	委員長 張替惠子　委員 赤羽幸子　委員 岩本恵真　委員 鈴木佳苗 委員　庭井史絵　委員 萩原敦子　委員 三原　忍　委員 若槻義隆 委員　勝又隆二　委員 福島文昭
事務局 出席者	教育長 竹内道則　図書館長 目澤弘康 中央図書館 前田奈緒子　中央図書館 後藤千春 中央図書館 飯田香代子
配布資料	資料１－１　第２次武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会設置要綱 資料１－２　第２次武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会傍聴基準 資料２－１　武蔵野市子ども読書活動推進計画　概要版 資料２－２　第二次武蔵野市子ども読書活動推進計画を作るにあたって 資料３－１　武蔵野市子どもの読書状況調査　結果概要 第２次武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会委員名簿 子ども読書活動推進計画策定委員会スケジュール
議　　事	**１　委嘱状交付** **２　教育長挨拶** 武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会の委員をお引き受けいただきお礼申し上げる。 武蔵野市では、未就学児におけるブックスタート、小学３年生時に読書動機付け指導が定着している。読書の不読率は、全国的に小学生は低く中学生になると上がるが、武蔵野市では全国や東京都平均と比較しても中学生の不読率が高い。第一次の計画策定時から同様の傾向にあり、課題と認識している。 今年度「第三期学校教育計画」を策定したが、武蔵野市では、子どもをめぐる家庭、地域での二極化が課題となっている。その中で、目標の１つに「自信と意欲を育む教育」を掲げた。 また、コロナ禍での学校休業の中、家庭学習に不安を感じる家庭もある。そのため、小学１年生から中学３年生まで、１人１台のタブレットを準備して学校教育に活用する「GIGAスクール構想」を、本来は３年後の予定だったが、今年度前倒しで実施することになる。これを学校教育活動の中でどう位置づけるか、また、子どもたちと本の関係性にどのような影響があるかが今後の課題である。 さらに、武蔵野市では、老朽化対策として校舎の改築に取組む予定である。その中で、図書館機能と様々なメディアを活用する「ラーニングコモンズ」という考え方が出されている。これも頭の片隅においていただき、検討を進めていただきたい。 最後に、これからご議論いただく中で、学校教育における「自信と意欲」という目標は、学校だけではなく、家庭や地域も含めて学校教育以外の部分においても大切と考えている。様々な本や媒体との体験が、子どもたちそれぞれの自信や生涯を通じた学習意欲につながればよいと期待している。 **３　委員紹介**

	【事務局】委員会委員長については、教育長が指名することとなっており、事前に張替委員に依頼している。よろしくお願いしたい。 **◆委員自己紹介** 【委員長】公益財団法人「東京子ども図書館」の理事長をしている。活動については後ほど報告させていただく。 【委員】市立井之頭小学校校長をしている。今年はコロナウィルスの影響で、読書動機づけ指導ができず書面での内容紹介となる。また、本校では毎週、保護者による子どもたちへの読み聞かせ活動が実施されているが、これも、今年度はまだ実現できていない。この委員会では、じっくり本に向き合う活動について一緒に考えていきたい。 【委員】武蔵野市に住んで15年になる。中学生と小学生の子どもがおり、中学生の読書率の低さを実感している。武蔵野プレイスをよく利用しているが、市外の方からも評判がとてもよい。専門家の方とは違った側面から役に立てればと考えている。 【委員】筑波大学図書館情報メディア系に所属。大学では、公共図書館・学校図書館の子どもに関する読書などが専門である。今回、現場を知る方とともに考えられる機会と思っている。 【委員】青山大学教育人間科学部に所属。２年前まで横浜の中学校で司書教諭を18年間しており、大学に移って２年目になる。専門は学校図書館。亜細亜大学で司書教諭の関連科目を持ち10年以上通っているので、武蔵野市には親しみがある。 【委員】「0123はらっぱ」で園長をしている。同施設は「吉祥寺」と「はらっぱ」の２ヵ所あり、図書コーナーを備えた大型の子育て支援施設で、両館ともに蔵書が3,400冊ほどある。子育て支援に関わっているので、現場の声をお話ししたい。 【委員】第一中学校PTA会長をしている。中学生と小学生の子どもがおり、２人とも読書、図書館が大好きである。小さい頃は幼稚園の帰りに図書館に寄ったり、読み聞かせ活動で図書館にお世話になったりした。今回、一緒に勉強させていただきたい。 【委員】市内第六中学校校長をしている。第六中学校では、昨年度まで年２回、読書旬間をやっていた。今年度は朝読書に取り組んでいる。また、武蔵野市では、図書室サポーターを各学校１人配置しており、学校だけではなく小中学校の横のつながりを持って取り組んでいただいている。中学生の不読率の低下に取り組んでいきたい。 【委員】武蔵野市子ども家庭部長として参加する。子ども家庭部は、妊娠・出産、地域での子育て、保育園・幼稚園、子育て支援施設や、小学校の放課後施策、児童の健全育成まで、０～18歳までの子どもの様々な施策を所管している。行政の立場から参加させていただきたい。 【委員】武蔵野市教育部長として参加する。「学校教育計画」の中の施策に「言語能力の育成」がある。OECD 調査で日本の子どもたちの読解力が低い結果があるが、語彙や表現力の不足を感じる。読書によって語彙や多様な表現力を身につける部分が大きい。今回、多面的にご検討いただき、実現に向けて努めていきたい。 **◆事務局紹介** 【事務局】武蔵野プレイスで２年、副館長をしており、この４月に中央図書館長に着任した。 **【事務局】**中央図書館でサービス担当係長をしている。 ＊今回公務のため欠席しているが、教育委員会指導課統括指導主事も事務局を担当させていただく。

	【事務局】中央図書館で児童・ヤングアダルトサービスを担当している。 【事務局】中央図書館にて勤務している。読書動機付け指導なども担当している。 【事務局】計画策定支援をさせていただく。 **４　子ども読書活動推進計画策定委員会の運営について** 【事務局】（資料１－１説明） 第４条３の委員長職務代理について、福島委員に職務代理をお願いしたい。 （異議なし） （資料１－２説明）第２条の傍聴人の定員について先着順20人とあるが、コロナウィルス感染拡大防止のため定員５人とさせていただくことをご了承いただきたい。本日、傍聴希望者はいない。 （以降の議事進行について委員長へ） **５　議事** **（１）現計画の概要及び取組状況について** 【事務局】（資料２－１） 第１・２章については、資料に記載の通りである。第３章の現状と課題・取組みについて説明する。 「１家庭・地域等の取組み」では、図書館として、ブックスタート事業等を継続実施できた。一方で、関係機関の職員を対象とした講座等の実施、家庭・地域による読書活動の実態把握が整理などが、残念ながらまだ十分ではない。 「２学校の取組み」では、読書時間の確保・充実について「朝読」や「読書旬間」が実施されている。中学生の不読率は、中学２年生の全国平均 12.5%、東京都平均 9.9%のところ、武蔵野市では 21.2%と高く、読書の習慣化が課題である。学校と市立図書館の連携事業として読書の動機付け指導を行っている。図書室サポーター等を対象とした研修では、図書館員や外部講師を招いた研修を実施している。サポーター会議の活動が少なくなっているので、サポーターの役割のあり方も議論していただければありがたい。 「３市立図書館の取組み」について、各年齢の段階ごとに事業実施している。ヤングアダルトへの取組みとしてワークショップを開催。ハンディキャップを持つ子どもへのサービスでは、「みどりの子ども館出張おはなし会」や「としょかん一日バリアフリー体験」を実施。保護者への啓発活動の実施、子どもの読書に関わる活動への支援については、保護者へのアプローチを強化したい。 「４関係機関等の連携、協力」について、図書館単独事業は充実できているが、家庭、地域、学校、関係機関をつなぐ役割は今後の課題である。 （資料２－２） 市立図書館の活動としては、０～９歳まで事業はかなり充実できており、地域・家庭への働きかけが今後の課題と考える。また、９歳以降へのアプローチが必要だが、この年代は学校の役割が大きいので、学校図書館と図書館の連携が課題である。子どもの発達にともない、子どもを取り巻く環境が変わってくるので、子どもの成長に応じた支援を考えていきたい。 **〈委員との質疑回答〉** 【委員】事業の詳しい内容がわからないので、説明資料が必要である。前計画の取組みがどうなっていて今後どうしていくのか、一覧でわかるように整理するとよい。 【事務局】承知した。資料を用意する。 【委員】学校図書館の図書室サポーターと司書教諭の雇用条件はどうなっている

か。学校図書館の充実は、いかにマンパワーをかけられるかと密接に結びついている。状況を教えていただきたい。
【委員】読書の動機付け指導は読書習慣につながると理解している。動機付けが高まることと、読めることを並行することが重要である。読めることについての話があまり出てきていないが、そのあたりどのように考えているか。
【事務局】図書室サポーターについては、臨時職員として時間給で雇用している。各小中学校に１名配置、１日５時間の勤務形態である。任用条件は司書教諭または同等の能力を有する者、委員会が認める者、教員の補助として適切な言動を取ることができると認める者で、司書資格は必須ではない。
【委員】図書室サポーターについて補足する。各クラス週１時間「図書の時間」を設置しており、それはサポーターがいる時間としている。その他、休み時間の図書の貸出対応、本の紹介、マナーの説明、図書の購入、４月の図書館利用に関するオリエンテーションでは図書室のしおりを作成し、しおりの掲示、児童の図書委員会活動を補助している。利用者登録や本の管理、読み聞かせ等もしてもらっている。
【委員】補足する。１日５時間で子どもたちに十分対応できるのかという課題もある。現在アルバイトとして臨時職員の扱いであるが、庭井委員からもご指摘があったように、雇用条件等の充実が必要だと考えている。今回の計画の早い段階で図書室サポーターについてご議論いただければと思う。また、鈴木委員より「読める」という話もあったが、実際の役割分担として学校の授業なのか、図書室サポーターなのか、どのような手法を取っていくか、これからご意見いただいて実現できるようにしていきたい。
【委員長】計画の中で、人材問題は１つの柱になるとよい。
【委員】資料１－１に、前の「子ども読書活動推進計画」は、計画期間が平成23年から概ね５年との記載がある。既に５年を過ぎているが前の計画が継続されているという理解でよいか。また、計画の本編は資料として配布されているか。原本がある方がわかりやすい。
【事務局】当初３月に委員会の開催を予定しており、その時にお送りしていると思うが、タイムラグがあり申し訳ない。
【事務局】計画期間について、概ね５年間なので平成28年に本来改定しなければならなかったところ、改定時期が延びていた。いったん計画時期を終えているが、取組みは継続実施中である。

（２）アンケート調査、読書調査について
【事務局】（資料３－ １より説明）
【委員長】以上について質問があればどうぞ。
【委員】学校の先生に伺いたい。11「読書冊数」について、小学３年生と比べて５年生では読書冊数が急に減少しているが、小学校で特別な取組みはされているか。
【委員】小学３年生については読書の動機付け指導の好影響もあると思うが、低学年では１冊のボリュームが少ないということもあるのでは。
【委員】読書の動機付け指導について簡単に説明をお願いしたい。
【事務局】昭和42年から継続している事業で、市立小学校３年生の全てのクラスに市立図書館員と講師の方が訪問し、ブックトークをして、１クラスに本を30冊プレゼントする事業である。その30冊は、１年かけて、図書館員、学校の先生等と選書したもの。小説だけではなく、いろいろな分野の本をピックアップしている。
【委員】昔は、子どもたちだけではなく、保護者に対する読書指導もしていた。
【委員】現在は、保護者は自由参加であるが、子どもたちがブックトークを受けている姿を参観した後、保護者の方々と講師による質疑応答や読書相談の時間を設けている。

【委員】子どもが小さい時の環境は、親の影響が大きい。家庭環境に介入するのが難しい時代なので、さらに方策があるのか考える必要がある。
【委員】本校では、保護者の方々が毎週火曜日に読み聞かせ活動を行っていることもあり、保護者の関心は高い。
【委員長】読書の動機付け指導の際のブックトークは、30冊分を一気に行うのか。年に１回なのか。時期はアンケート調査と合致しているか。
【事務局】プレゼントするのは30種類の本で、クラスが35人の場合は、副本で同じ本を２冊とする。読書の動機付け指導は年１回、５～６月に実施している。
【委員長】（資料３－１の）アンケート調査は10月実施なので、読書の動機付け指導の直後ではないが、子どもたちは高い評価をしている。
【委員】プレゼントされた本は教室に置いてあり、誰かが読み終わったらシールを貼っていく。それによって、クラスごとに最も人気の高い本が明らかになる。
【委員】国語の授業等で読書感想文の課題を出すこともあるが、読書をしたら必ず何かを書かせることが、本離れの一因になっているのではないか。朝読書で、以前は成果物を作らせていたが、あるときからそれをやめて、どんな本でもいいからじっくり読ませるようにしたら、生徒の読書冊数が増えてきた。
【委員長】読書感想文の功罪については、図書館と学校の先生で意見が常に平行線をたどる、古くからの命題である。強制はしない方がいいのかもしれない。
【委員】自分たちは、感想文はそれほど書かせていない。ビブリオバトル等でディベートはやったことがある。
【委員】アンケート調査結果報告の「家庭での読書環境」で、８割の保護者は「小学校入学前、本を読んであげた」と思っているが、「本を読んでもらった」と思っている子どもは４～５割、という結果はショックだった。成長したら必ず役に立つと読み聞かせをしていたが、子どもの記憶にないというのは残念だ。ただ、結果的に（自分の）子どもは本好きなので、読み聞かせの効果はあったかと思う。
【委員】三原委員は、お子さんを図書館によく連れて行ったとのことだったが、それも効果があったのでは。
【委員】中央図書館は前に広場があり、子どもが図書館で絵本を読んでいるときに広場で親同士話ができて、親子それぞれの居場所があったことがよかった。
【委員長】親の居場所があるということも、とても大切と思う。

（３）委員からの課題提起
【委員長】本日は第１回目の委員会ということで、有識者の先生方それぞれの分野から子どもの読書活動をめぐる状況についてご報告いただきたい。鈴木委員からお願いしたい。
【委員】（資料「子どもの読書の現状と課題」より説明）
　子どもの読書の現状と課題ということで、基礎テーマを共有し、今後の議論の拠り所となるところを報告したい。全国的な大きな調査から子どもの読書の現状をまとめた。
　まず「第 65 回学校読書調査」によれば、１ヶ月間の平均読書冊数は、小学生 11.3 冊、中学生 4.7 冊、高校生 1.4 冊である。先ほどの武蔵野市の小学 3 年生で最多だった 25 冊は非常に多い印象だ。不読率は、小学生 6.8%、中学生 12.5%、高校生 55.3%である。
　次に、文部科学省の平成 30 年度委託調査「子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書」を紹介する。この調査の対象は小学生から高校生の子どもとその保護者である。この調査には電子書籍の項目があり、紙の本と比較すると電子書籍の読書率は低い。「自分から進んで紙の本での読書をした」という、「自発性」を問う条件が入ると、その比率は通常の読書率より低下し、小学生 45.0%、中学生 36.3%、高校生 30.6%となる。読書の意義を問う研究が

	1990 年代に行われており、読書が「役に立つ」「気分転換になる」等、ポジティブな動機付けがあると、その後の読書につながるという結果が報告されている。これらのことから、単に読書をすすめるだけではなく、子ども達の認識自体をみていく必要がある。 電子書籍については、40%以上の子どもが図書館等で電子書籍を借りられるようになるとよいと思っていることが報告されている。その他に図書館、書店・本屋に行きやすい、学校図書館がいつでも利用できる場合などは、本を読む子どもの割合が高くなる傾向があるなど、環境整備の重要性も示されている。 文部科学省の平成 28 年度委託調査『子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書』では本を読む理由、きっかけについて調査している。本を読む理由として「気分転換」「楽しむ」認識が高いと、自発的に読むことにつながっていく。本を読まない理由として、高校生では「時間がなかったから」が一番多く、「文字を読むのが苦手」という回答が相対的に多く見られた。中学生では「面倒」、小学生では「文字を読むのが苦手」という回答が多く見られ、「読める」という話に関連する。学校図書館の充実度が高い学校の児童生徒では、平日に本を読まない割合が低いことなどが報告されている。 読書環境をどのように整備するのか、ポイントを絞って議論していく必要がある。読書環境は定義があるので、議論の際に何を読書環境とするか考えておく必要がある。「よい読書環境」の定義を挙げてみると「各人にとっての適書が入手可能であり、読書時間が確保されている状態」となる。中高生で読書時間がない場合、どのように確保するのかを検討していく必要がある。 また、適書については一般的な良書では必ずしもなく、その子ども達に合った本をどのように提供していけるかが重要である。適書について理解するための基礎知識が必要である。読書の発達に関する理論について、参考資料をつけたので後でご覧いただきたい。表１・２ともに個人差があるので、プラスマイナス２年程度の幅をもたせて考えていただきたい。 最後に、子ども達への働きかけが重要な時期として、３つの関門があると言われている。第１関門の３～４歳は本に親しませることが重要で、通常では読み聞かせ等にあたる。第２関門の小学校３～４年生は読書興味の幅を広げる時期である。自分の興味関心の合うものに焦点を絞っていくために、いったん広げるプロセスが重要なので、小学校３～４年生でブックトークを実施するのは重要である。ブックトークの全国の実施率をみると、小学校で４割程度、中学校で２～３割で、読書の幅をひろげるべき時期に実施されていない現状がある。それぞれの年齢に合った活動があるので、重点的にどのような事業を実施していくか、例を示すと議論を進めることができる。第３関門の中学生は、読書によって内面の充実や感動を求める時期である。 このように読書能力の段階についての見解もあるので、必要なところをうまく取り入れていければよい。研修等も課題に挙がっていたが、今後うまく取り入れられればと思う。 【委員長】ありがとうございました。質問等なければ、次に庭井委員にお願いしたい。 【委員】（資料「子どもの読書の現状について」より説明） 子どもの読書の現状について、３点問題提起をさせていただく。現在は大学に所属しているが、今回の内容は、以前横浜の私立の男子中学で、一番読書から離れる時期の子ども達との 18 年間の司書教諭の経験からお話させていただく。 １つ目として、読書の対象についてよく考えなければいけない。１冊の本を静かに読むことだけを読書だと捉えると、読書する中高生を増やすことは難しい。一方で、彼らは、本以外のメディアで情報を受け取ったり、他人の経験を共有したり、知識を得たり、本以外の媒体にたくさん触れてきている。読む文

	字情報量は多く、ひょっとすると、昔より多いくらいではないか。中高生がスマホをはじめ様々なデバイスを手にするようになる中で、メディアも含めて「読む」ということを考え、サポートしなければいけない。紙の本を１冊読みなさいというだけを読書と考えると、推進は難しい。情報収集の際に本ではなくインターネットを使うということは、えてして否定的に議論されがちだが、現場では当然だと思っている。インターネット等の読む力をつける観点から読書を広義に捉えていく必要がある。 　２つ目として、武蔵野プレイスの地下スペースのような場作りである。私が以前いた男子中学校の図書館では、禁止事項をなくし、彼らが日常的に行っている様々な活動、将棋、囲碁、筋トレ、理科の実験の続き、宿題等を図書館でもやってもいいとした。彼らが日常的にやっている遊びの延長線上に図書館を位置づけた結果、貸出冊数が 10 年間で 3,000 冊から 25,000 冊に延びた。自分たちの活動の延長線上に本を手に取る機会を増やす、友人同士の対話を増やす活動を取り入れていく場作りが効果的である。 　読書法の調査をしたところ、読む行為が人生のいろいろな場面でどのように役立つかが紹介されている。井庭崇という研究者が、創造的な読書を提唱している。何のために読書をするのか、どういうふうに読書をするか、社会的環境が変化してきている。昔は消費社会で本を消費しており、どんな本をどのくらい読んだかが重要なポイントだった。コミュニケーション社会になると、読書がコミュニケーションツールの１つになった。これからは創造社会で、技術的な発展で人が社会の仕組や環境を自分でつくれるようになったときに、読書をどのように位置づけていくか考えることが重要と言われている。創造社会の考え方は、中高生の読書を結びつけると親和性が高い。たとえば、都城市図書館内には「ファッションラボ」という被服室があり、専門家を招いて T シャツにプリントする等、司書が一緒に活動している。工学院大学の付属中高では図書館内に３D プリンタを置いて、プログラミングの講座を開催し、図書館活動の１つとしている。 　３つ目として、学校図書館の重要性について。中高生の読書を考えていく上では、学校図書館の充実、特に中高生では放課後まで開館することが重要である。授業のなかで図書館を利用することはもちろん重要だが、放課後の活動の場の１つとして学校図書館のあり方を考えていく必要がある。中高生に本をすすめられる先生が少ない。先生が中高生の読む本を勉強するといった機会を含めて、司書教諭等への研修も重要である。 【委員長】ありがとうございました。次に、私の方から東京子ども図書館の活動について報告したい。まず広報映像をご覧いただきたい。東京子ども図書館は私立の公益財団法人が運営しており、出版事業と講師の派遣、講座を開催して収益を上げながら運営している。歴史が長く、子どもたちとずっと楽しんできた経験を本づくりや図書館の現場にフィードバックしている。子どもの本の中には古びない良書がたくさんあり、図書館員がレパートリーとしてたくさん知っていないとサービスができない。図書館員が安定した職場で経験を積んでいくことが一番のサービス向上だと思い活動している。 **６　報告事項** **（１）今後のスケジュール** 【事務局】（資料「子ども読書活動推進計画策定委員会スケジュール（予定）」より説明） 【委員長】ご意見あればお願いしたい。 　（意見なし） **７　その他**

	（１）日程調整 【事務局】 　＊日程調整 　第２回は８月 27 日（木）17 時半より 【委員長】以上で第１回子ども読書活動推進計画策定委員会を閉会する。 （以上）